

この歳になって、新しい画材を買う、今まで使ったことがないモノを手に入れる、ワクワクする、描いてみたい、使ってみたい。手に入れたのは、faber-castell 独製のオイルパステル。

オイルパステルとはなんのこと、と問われるかもしれないが、子供専用のクレヨンのことである。「それはちがいますぞ」とおっしゃるごにもあるやもですが、大人のオレが気持ちよく絵を描ける画材ですぞ。

若いころに画材屋の奥山さんが、「これ 使ってみませんか」と紹介されたのが、スイス製のオイルパステル<カラダッシュ>「おお 子供用だと思っていたけど・・・これはいいですねえ」と以来ずっと使いつづけているけれど、あくまでも白いキャンバスの最初のあたりに線を入れるだけ、絵は描いていなかった。

我がアトリエで絵を描いている方が、「歳なので 油絵具は卒業 これからは 色鉛筆 パステル どれかを探して・・・」と何枚か描かれた後に、今はオイルパステルを使っておられる。

先日画集をつくった、といってもたった 12 ページ、紙も薄くペラペラ、表紙の紙もペラペラ、商品カタログのようなものだが、「ま みなさまに 無料で配るもの これでいいか」と満足している。余談になるが苦労話を吐露します。画集を作ってみようかと印刷屋のサイトを調べると、全 12 ページで 2 万円ぐらい、色校正を含めると 3 万円ぐらいかな、よしやろう、と始めた。まずはパソコンに保存している画像を探した。各ページに画像を配置して本の体裁を整えた。「色を合わせよう 絵を探さなければ」絵を探すのが大変な作業だった。過去の絵を奥から探しだす作業、こういうことなら、まず奥の絵を出して、その実物から載せる絵を選ぶべきであったと猛反省。各ページの色校正をすると、値が高くつくかなと恐れていたが、同じ印刷屋に、大判のプリンター印刷がある。複数枚の画像を一度に大判のプリンター印刷で依頼した。これは安価なのに色は正確だった。まもなく展覧会、これを配らなくてはと思っているが、厄介なコロナウイルスのおかげで、今や世間は騒がしい、「オレの展覧会は どうなる」いささか気が重い。展覧会が中止になるやら、観客動員が異常に少ないやら、絵がまったく売れなくて、会場経費も出ないやら、一か月先のぼやきはこうなっているやら。

余談の話で脱線してしまっただが、その画集の表紙のデザインをどうしようかとさんざん迷っていた。ふと思いついたのが、「スイス製のオイルパステルで 落書きしよう あれがいいかも」いくつかを造ってみた、白い紙に黄色を、緑色を、赤色を・・・力を入れたり抜いたり・・・強い色に、かすれに・・・あとは一気に仕上げで印刷屋に注文、紙は少々安物だけれど、気に入ったものが出来上がってきた。

faber-castell のオイルパステルは、スイス製のオイルパステルにくらべて粘度が柔らかい、そのぶん、紙の上で潰れ、ねっとり色が乗る、これはいい。先日描いた表紙と同様の落書きをいくつも描いている。

新型コロナウイルス、こいつのおかげで、世のなか右往左往状態のようだ。ニュース解説の先生方、街のぶつくさおじさんおばさん、「今これを決断の時」「いや違う 決断するのはこっちだ」「あの時点でこうすべきだった」口々に勝手意見を言いあう。オレは相変わらず何がどうなっているのかわからない、「オレの展覧会の時期にややこしい状態になってきている」ぼか～んと様子を見るしかない。

展覧会は一年のくぎり、一年間で描いた絵の中から小さい絵を、うまく描けた絵をずらりと並べればいい。搬入の時に、飾りつけをしながら、ハラハラドキドキしながら、絵を並べていく。「どうだ いい絵だろう」としたり顔はしているけれど、実際の話、小心者のオレの腹の中は、ハラハラドキドキである。今年はコロナのおかげで、来ていただく人数は少ないだろうか。そういわずに観に来てくれ。

聞いたところによると、古事記に載っている内容、物語が、戦前の教科書に載っていた、子供たちがその内容を知っていた、普通の日常のように話していたらしい。太平洋戦争が終わったのち、オレの世代でも、「なにやら銚をかき混ぜて 国土ができた」「うさぎが ワニなるサメをだまし 皮をひん剥かれたところを オオクニヌシノミコト に助けられた」ていどの話は聞き知っていた。絵本に載っていたのか、親やら、ジジババに物語ってもらったのかはわからないが、内容は鮮明に覚えていた。

本居宣長の名前も知っていたが、三重県松阪出身の国学者ぐらいしか知らなかった。江戸時代に古事記の研究をし、埋もれていた古事記を再び世に出した人らしい。

日本書紀と並んで、「記紀」と呼ばれていた。日本書紀は膨大な漢文で書かれた日本の正史だった。古事記も漢字で綴られているが、漢文でもないの（このあたりはオレにはまだよくわかっていない）いかに読まれていたか、それを本居宣長が、いかに読み下していったか、興味がわいてくる。

もっとも驚いて、オレ自身を振り返って、羨望の齒ぎしりになったことは、本居宣長が古事記とかかわって、35年の歳月を費やしたことです。一つのことになんな長い年月をかける、かける仕事がある、かける情熱がある、かける人生がある、これが羨ましい。オレはのほほんとして絵を描いている、そらあこの歳になっても毎日絵筆を握りしめてキャンバスに向かっている、何日かに一枚ずつ絵が仕上がっていく。これは嬉しいこと、素晴らしいことかもしれないが、例えば一枚の絵を5年10年かけて仕上げたら、もっともっと素晴らしいことだろうと確信する。人生五十年を費やして、たった一つのことをやっていくことほど素晴らしいことはない。

尋常小学校の国語教科書に載っていた。「松坂の一夜」には、70歳近い老大家、「賀茂真淵」と面会する。

二人はほの暗い行燈のもとで対座した。真淵はもう七十歳に近く、いろいろりっぱな著書もあって、天下に聞こえた老大家。宣長はまだ三十歳余り。温和なひととなりのうちに、どことなく才気のひらめいてある篤学の壮年。年こそ違へ、二人は同じ学問の道をたどってゐるのである・・・。

古事記伝の完成に向かうころ、真淵との対談が書かれている。

宣長三十あまりなりしほど、県居の大人（あがたいのうし：真淵の屋号）の教えをうけ給まわりそめしころより、古事記の注釈を物せむのこころざし有りて、そのことうしにもきこえけるに、さとし給へりしやうは、われももとより、神の御典（みふみ）をとかむと思ふ心ざしあるを、そはまづからごころを清くはなれて、古へのまことの意をたづねえざばあるべからず。古言をえむことは、万葉をよく明らむるにこそあれ、さる故に、吾はまづもはら万葉をあきらめんとする程に、すでに年老て、のこりのよはひ、今いくばくもあらざれば、神の御ふみをとくまでにいたることえざるを、いましは年さかりにて、行さき長ければ、今よりおこたることなく、いそみ学びなば、其心ざしとぐるこ有るべし。

宣長と真淵の歴史的な出会い、宣長は34歳、真淵は67歳になっていた。真淵から、彼の意志ともいうべき、「古事記」の注釈の業の継承を、あるいはその達成の課題を告げられた。

真淵によれば、神典を解き明かそうとするならば、まず唐意（からごころ）を排除して、古のまことの意をとらえなければならぬ。古事記における古言を得るには、「万葉集」を明らかにしなければならぬ。真淵は万葉解明に時間を費やしてきた。かくて古事記注釈のための時間は少なく、その業の達成は若い宣長にゆだねたいと真淵は語った。

オレにとって、万葉集そのものをまともに読めない、その気持ちやら思いやら、その情感やその良さやら、当時の日本人がなかなか伝わってこない。とはいえもうちょい読んでみよう。

西條勉著<古事記の神話を解く> 今回は、少し歴史と、国語のお勉強かな。

古事記の分量は 400 字詰め原稿用紙で 150 枚ぐらい。上中下の三巻に分かれている。神話の部分は上巻の 50 枚ぐらいに書かれている。同じような内容を持つ日本書紀は全体で三十巻もある。

よく古事記は神話の書、日本書紀は歴史書といわれる。「日本」という国号としての言葉が使われたのは意外と新しい。前方後円墳を築いた大和朝廷の時代には、「倭人」と呼ばれており、「倭の国」であった。670 年、中国の書物に、「倭の名をにくみ、あらためて日本と号す。使者みずから言う、国、日のいずる所に近し。ゆえに名となす」672 年には壬申の乱<天智天皇の皇子と実弟の争い。子：大友皇子に対し、弟：大海人皇子が兵をあげ勝利して、天武天皇になった。>が起り、天武が統治を始めた。そのころ、「日本」が成立したようである。

「倭」は中国人が辺境の民族を蔑視して付けた名前。背が低くなよなよしているという意味。大和朝廷時代、この国の君主は、大王（だいおう）と呼ばれていた。それが天武時代に、「天武天皇」の木簡が発見された。

中国では、天皇（てんこう）は、北極星を指した。東方世界の最高指揮者、太陽が昇る、日の下、そこを収める君主ということで、天皇になった。当時の中国：唐は大帝国だったのである。同じころ朝鮮半島を統一した新羅は強国だった。防人を九州に配備したのも、新羅に対する防衛だったのか。

古事記は、稗田阿礼が訓読した資料を、太安万侶が編集したという。安万侶は原文の訓読みしづらい個所に、注をつけた。余談だが、このころに柿本人麻呂がいた。

日本語に重大なことが生じた。宣命体（せんみょうたい）の形ができつつあった。ヤマト言葉を漢字で表すとき、助詞、助動詞等を、仮名、漢字を音だけで読ませる方法。今の日本語の書き方の元である。

日本書紀は堂々とした中国語で書かれているのに対し、古事記は、辺境の土着のヤマト言葉で表されている。「漢字で和語を書く」<例：我々は、真理子（まりこ）や幸枝（さちえ）と書くが、中国人はシンリシヤコウシと読む>日本人は千年以上かけて、中国の文字、「漢字」を使いこなしてきた。古事記での例<萌騰-もえあがる、と書いてある。ヤマト言葉のモエでは、萌えも燃えも同じ音だが、漢字と出会って、表意に従った>

古事記は、万葉仮名のように、音でヤマト言葉を書いている部分、漢文風に書いている部分と、バラエティにとんでいるが一貫性がない。

東野炎立所見而反見為者月西渡 柿本人麻呂の和歌。当時なんと詠んだのか。和歌だから 31 音だよな。

ひんがしの のにかげろひの たつみえて かえりみすれば つきかたぶきぬ <江戸時代：賀茂真淵訳>

国稚（わか）<浮きし脂の如くして、久羅下那州多陀用弊流之時（くらげなすただよえるとき）、葦牙（あしかび）の如く萌え騰がる物によりて成れる神の名は・・

国土が固まらず脂のようにぷかぷか浮かんでいるときに、葦が勢いよく芽吹くようにしてあらわれた神は・・。

古事記の文章は、万葉仮名をそのまま写している部分と、漢文風に書かれている部分がある。当時の日本人、天下を統一していざ、大国である中国の唐、朝鮮半島の新羅、そんな大先進国に向かい合った。負けまいぞと思えども自前の文字がない。ヤマト言葉があっても、文字がない。ヤマト言葉でそれぞれにコミュニケーションはとれていた。文字をもたない日本に、漢字がやって来て 1500 年。漢字は日本に定着している。

オレは外国語が離せないが、子がアメリカで育ったなら英語は話せる。言葉とはそんなものだ。

◎テント泊の山を予定していたが、昨日はジャジャ降りの雨、「せっかくなので 日帰り山でも 登りましょう」と比良のイン谷口へやってきた。新型コロナウイルスが流行っているということで、どこかもが自粛やら休業やらの今、山なら全く心配もないということなのか、山の中で10人ぐらいの人と会った。

◎7時に茨木ICに乗り、湖西道路、「イン谷口は どこで降りるのかな」思い返せばここへは車で来たのは大昔に一度ぐらい。いつも電車でやってくる、おかげで一つ手前の滋賀ICで降りてしまい、遠回りをした。

◎車が4台止まっているところに駐車した。ピッケルを積んできたが、雪はなさそう。スパッツだけ着け、防寒具を、上着を、毛糸の帽子もザックに入れた、水も1リットルで足りるだろう。ハチマキを忘れた、いつもハチマキが顔の汗を吸い取ってくれるが、今日は手で、ミニタオルで、流れる汗をぬぐった。

◎8:40 歩き出した。うららかな天気、途中の車道からも見ても、比良てっぺんスキー場にペタリ人口雪が張り付いているぐらい、峰々にはまったく雪がない。これもこの冬の異常気象だろうね

◎空はまっさお、雲ひとつない。三月の空気は冷たいとはいえ、背中にあたるおひさんが暖かい。山にやってくると、天気がいいことは、おひさんの顔が見られることは、何にもかえがたいありがたさ。まだ樹々の枝には緑はないが、まもなく顔を表すぞとふくらみを感じられる。昨日の雨で地面は湿っているが、それもまた心地いい。

◎いつもは電車から降り、イン谷口まで1時間の徒歩。以前たまたまバスが目の前にありそれに飛び乗った。イン谷口行の登山者専用バス、300円ぐらいは高いと思ったが、あとあと軽々と金糞峠に登れた。あの徒歩の1時間がなければ山はらくちんだと思ったが、あれから5年以上たって、山はやはりしんどいと思っている。

◎アオガレを通り過ぎ、谷筋を登っていく。「おおあそこが峠かな」V字カットの青空が覗く。急な登りはなかなかしんどい、岩の間をおっちらえっちら。この谷筋は雨が降れば水がザーザ一流れ、岩や砂を押し流して行くのか、道が変わっていることが多い。登山道というより水の流れてへこんだところを歩く、そんな凸凹がよく変わるのかもしれない。登山道は不変ではないのだ、大雨が降ればがらりとさまがわり、それが山なのだ。金糞への急登がきつかった、「こんなにしんどいか 歳だねえ」とぼやきながら登った。

◎10:20 金糞峠にやってきた。予定では八雲湿原を通して北比良峠からイン谷口へ帰るルートを予定していたが、「まだ時間が早い 武奈ヶ岳に行ってみよう 無理なら引き返そう」と欲張って歩きだした。

◎中峠に向かうあたり、山の上のやや平らなところ、川筋やら、多少のポコリンやら、なんだか楽に歩けだし、先ほどの疲労感が無くなった。まだらまだらに雪が残っている、いい景色、いい空気、いい色、ご満悦。比良山系は人が多いのか、赤い標識がいたるところにあって歩きやすい。

◎川筋やら、多少のポコリンやら、ここは気に入った。人がいない、大きな木がいっぱいある、若々しく背を伸ばしている奴、倒れ巨木、折れた大木、枯れて空洞ができて苔むしているやつ、どれもこれもじつに格好がよくまわりを威圧している。オレはこんな風に命が終わったでかい樹が好きなんだといまさらにわかった。

◎12時前に、コヤマノ岳というところに着いた。目の前のポコリンが武奈ヶ岳、もうあそこまでは30分もかからないだろう。ここも何度か来ているが、ほっとする、きれい、気持ちがいい、お気に入りだ。「ああ ブナが若いブナが 小さい樹が その中に時々 でっかいやつが ぐにゅぐにゅと ねじれて立っている」

◎すぐにてっぺんにやってきた。4.5人の人が弁当を食っている。ところどころに雪が残っている。琵琶湖のほう、青黒い色の琵琶湖、同じ色の向こうの山々、その間に白い霞がかかっている、妙に幽玄の世界。空は晴れおひさんも出ているが、まだまだ雨のなごりの空模様なんだ。ここで弁当を食った。五目飯と佃煮、同道の前川さんから少しおかずをいただいた。30分以上休憩して、1時に武奈ヶ岳を出発。

◎2:30 北比良峠着。今日は一日、厚てのシャツを2枚でずっと歩いてこれた。汗をかいた身体に琵琶湖から吹き上げてくる風が冷たいけれど気持ちがいい。昔のケーブル山頂駅のあったところは、まったく構造物が無くなって草が生えている。今の季節はその草も枯れ、その枯れ草の上に座って水を飲んだ、パンを食った。

◎帰りはまっすぐイン谷口へ。途中のカモシカ台で小休止。車に着き、湯を沸かし、コーヒーを飲んだ。茨木に帰り着いたのはまだ明るい5時過ぎだった。7時間半の行程。武奈ヶ岳まで行けてご満悦である。

毎回のことだけれど、個展のひと月ぐらい前に、来廊御礼の文章を書いている。新大阪のシエスタ倶楽部の展覧会、もう10回ぐらい続いているのかな、毎年3月に開催している。

ただ今回は新型コロナウイルスという厄介な風邪が流行りだした。いつもはもっと早く、一か月前ぐらいにはこれをやっているが、このコロナ、早く収束してくれと願いつつも、大流行にはならないが、収束もしない、「展覧会ができるかな」と一抹の不安がぬぐえない今の現状だ。

ここの会場で思い出すのは、東北大震災の時には画廊の中の水槽がおおいに揺れ、オレも田鶴ちゃんも、「なんだか ふらふらするね」なんて間の抜けたことをいっていた。

飯橋先生が亡くなった。「明日は初日だ 午前中に行くわ ちょっと留守番するわ 何回も行くわ」と楽しみにしてくれていた。その初日、「こないなあ おかしいなあ」と思いながらも家に帰った。「飯橋ですが 主人が亡くなりました」その言葉に絶句した。

シエスタでは毎回、展覧会の終わりころの金曜日に パーティをしている。パーティは、オープニングパーティが、展覧会初日が普通だけれど、「初日に酒を飲むと 最後まで 体力がもたない」というオレの勝手な理由で終わりのほうに開催するようにしている。

パーティでは、毎回、中西さんが写真を撮ってくれている。「今年も 行きたい・・・」と言っていたが、パーキンソンで身体が弱ってきている。

「岡村さんの展覧会は 老人会みたい」とおっしゃる若い方がいる。オレには若者の仲間がいない、同世代の人たちになってしまうと、オレが60歳の時はその前後、オレが70歳になればその前後、しかもだんだん数が減っていくという現象がいなめない、若者たちよ、なんとか覗いてくれないかと頼みたい。

今年の展覧会の出品作品は、全部近作になっている、いや近作というよりは、この一年で描いた絵になっている。一年で大小含めて、50枚60枚ぐらいの絵を描くのかな。だんだん上手くなってきた、まとめるのも、描くのも、上手くなってきた。ほんとうは、この上手いということがくせものである、とつねに言っている。画家が、アーティストが上手くなったらおしまいだ、とつねに言っている。「ああすれば・・・こうすれば・・・ちがう・・・そうじゃない」モノ造りは、迷って、悩んで、訂正、修正、否定、ののしり、こういう低空飛行が大事なんです。上手くなって、スタイルが決まって、いつも楽しく絵が描ける、こういう状態はいけませんぞ。とはいえ低空飛行よりは、上空を滑空するほうが楽しい。山登りで言えば、谷筋をエンヤコラ上り下りよりは、尾根道をゆうゆうとして、まわりを見渡しながらか歩くほうがいいかな、それともこのたとえはおかしいかな。いずれにしても、この歳になってやっと描けるようになった、上手くなった、これが良いのか悪いのか、ただまああきずに毎日機嫌よく描いている。

なんてこと書きながら 「中止」を決めた。今回の展覧会を中止にした。画廊のほうの会場費は、「いらぬよみずくさい」と言っていた。1500枚の案内状、ほとんどをばらまいた。200枚ぐらいの郵送分はまだ投函していなかった。さあこれから皆さんに中止を伝えなければ。

世の中の不景気に拍車がかかる、おこぼれがまわってこないのは痛いねえ、と笑っていなくては・・・。

ますます新型コロナウイルスが猛威を振るっている。世界中の都会で、外出禁止だとか、必需品、食料品を売る以外の店舗は閉鎖せよとか、街から出るな、移動するな、すごいニュースが流れはじめた。世界の主要マーケットの株が大暴落しているという。株のことはまったくわからない、オレ自身、株が暴落ということは直接関係ないが、マスコミが、世間の人々が、暗い顔をしている。財産が半分になってしまったと嘆いておられる。

この何日か、日々の TV 番組がコロナウイルス一辺倒の大騒ぎである。もっとも一辺倒は今のマスコミでは普通のことで、何か問題が起こればそのニュースばかりが流れ出す。マスコミの各社、皆がみな同じ問題をちよつとずつ視点を変えて一か月二か月の時間をかける。今回のコロナウイルス騒ぎがでて、今で一二月たったのか、報道も安定してきて他のニュースも隙間に挟むようになってきた。ただ、日本は感染者の増え方や死亡率がさほど急カーブで上がってはいないのに比べ、ヨーロッパではそのカーブが急らしく、アメリカまでそのカーブに追いついたし、欧米では非常事態宣言的なものが発令されているらしい。

中国発症のコロナ、中国の正月である一月二十五日前後に、中国人が春節を祝って大騒ぎするのか、故郷へ帰ったり、休暇を利用して他の地域へ旅行をするのか、家でじっと静かに祝うのか、それはわからないがどんどん数字があがっていった。中国で大変な病気が流行りだしたと思っているうちに、話が日本にも飛んできた。

オレは2月の時点で、楽観的に見ていた、まもなく収まるだろうと思っていた。発症元の本家、中国でその規模がどんどん大きくなっているらしいことは知っていた。3月に入ってもまだ、まもなく収まるだろうと思っていた。3月の中旬には収まって、コロナのことを笑いながら展覧会を開催しているだろうと思っていた。

先日 TV の座談会形式のニュース解説で、何人かのコメンテーターが話しているうちの一人が、「会社員や 公務員以外の 一部の フリーランス の人たちが 大変だ」この話、聞き流していたが、フリーランスとは昔ながらの自由業、「オレじゃねえか」とその話に目覚め苦笑した。絵を描いていく、これを続けていく、「飯を 食べないのは 当たり前」「あたれば 大きいかもしれないが それはあくまで結果論」「飯を 食うための仕事をしては いけませんぞ」なんて若いころはしきりに叫んでいた。この歳になっても、「飯を 食べないのは 当たり前」「なんとか 食っていけるのは ありがたいことだ」今も思っている。

コメンテーターのひとりが、私もフリーのニュース解説者だが、カメラ・映像・芝居・音楽・いろいろな分野の人々がいる。あえてフリーな立場を選んで、好きな仕事、それに対する使命感やら情熱、そんなことに邁進しているフリーランスの人たちがあちこちにいる。ほとんどのそれらの立場の人たちは、普段から生活、収入ということでは、ぎりぎりの生活をしている。そんな人たちがこのコロナ騒ぎの渦中であって、臨時雇用、非常勤雇用と人たちと同様、仕事がなくなる、「明日から 来なくて いいよ」「仕事は しばらく お預けに なりました」ますます経済的に追い詰められている。人の生命、国の経済がおかしくなりつつあるようなときに、非生産的な仕事に情熱を燃やしているような奴に援助をする、補助をだす、なんて言っていられない。「しばらく 寝ていてくれ こんな非常時に 君たちの仕事 観ることも 感じることも できないよ」そんなことを言っただけで我が国の文化の底辺が崩壊する、そういう人たちにも援助の手を差し伸べるべきである、なんて力説していた。

オレの考えは違う。絵を描く人間、そんな奴は自由業が当たり前、自由が当たり前、国や体制に支えられて、仕事をやっていく、給金をもらって飯を食っていく、材料費をもらって仕事を続ける、それはもってのほか、ありえない。そんな仕事、やりたかったら勝手にやればいい。補助も援助もない、それでも勝手にやれ、である。

このコロナ騒ぎ、このまま収束に向かうのか、一部の専門家が言うように、世界的な大流行、大問題がこれから発展するのか、だれにも予想がつかない。オレも、3月中旬には収まってくるだろう、オレの展覧会のころには、「えらい 迷惑な コロナだったねえ」という会話がされたいだろぐらいに思っていた。

文字がある、これは本当にすごいことだと改めて思う。縄文時代人も、もちろん話してたと思う。初期のころは単語で怒鳴りあう程度のもの、それがだんだん、助詞やら助動詞ができ、会話らしくなってきたのかな。それでも、言語を文字で伝える、例えば単語のひとつでも、記号で書くとか、紐の結び目や、葉っぱを並べるとか、そんな工夫ぐらいあったかな。縄文人は文字は持たないけれど、絵、印、記号ぐらいあったかも。

中学生の社会科の教科書、エジプト文明とメソポタミア文明は 5000 年前の形象文字とくさび文字。インダス文明は 4500 年前にインダス文字。中国文明は 3500 年前に甲骨文字。

西條勉先生：文字を持つと、声の届かない仲間ともコミュニケーションできるし、記憶の限界だって超えられる。文字は空間を超え、時間を超える。考えていることが多くの人々と共有できるようになる。また個人の思考を変化させ、やがて集団の意識にも変化をもたらす。

漢字で和語を書く：表意文字である漢字を、その表意性を生かしてヤマト言葉を文字化した。1) 音読み訓読みを作った。2) 訓にヤマト言葉を宛てて読む。3) ヤマト言葉の語形を音で示す。天武の新しい体制、文字が書かれ、日本語が成立した。

西條勉先生：古事記の神話のストーリーに注目しよう。1) ムスヒ（天地初発） 2) イザナキ・イザナミ 3) アマテラス・スサノオ 4) オオクニヌシ 5) タケミカズチ 6) ホノニギ（天孫降臨） 7) ヒコホホデミ（地上の支配） 8) カムヤマトイワレビコ（初代天皇） このように日本の神話は八つにわけられる。話の舞台も、「高天の原」「葦原の中つ国」「黄泉の国」「根の堅洲国」「海神（わたつみ）の宮」とめまぐるしく移り変わる。一見すると複雑である。天地初発から始まり、人格神の起源、国土の生成、世界の分治、王が誕生し、天上世界、地上に下る、国土の生成、そしてそこを治めると続いていく。

天地初発：アメツチ ハジメテ オコリシトキニ こう訓読するしかない。古事記ではあらかじめ、「天」も「地」も存在する、時間が始まっていないだけ。日本の神話では、止まっていたすべての宇宙が動きはじめた。はじめの時は、世界はすべてが、高天の原と呼ばれる天上世界だった。

最初の三神の存在はなんなのだと、思っていた。現れてすぐに消えていく、なんだろう。

この世の初め、最初に現れたのが、「雨の御中主の神：アメノミナカヌシノカミ」である。宇宙の中心を定めた神、宇宙の中心を定め、動きのある世界が開始する。

中国のある説では、「木・火・土・金・水で宇宙を」 ギリシャでは、「混沌だ：カオス」 現代では、「宇宙の始まりは ビックバンから」「ビックバンなんて 誰も見てないし ほんとうかね それとも神話かな」

次に現れたのが、「タカミムスヒ」「カムムスヒ」 ムスは「育つ」や「生える」の意。生命の活動が始まる、命の力、生命現象そのもの。この世の最初に生命が現れたという日本の神話の始まり。

生命の始まり：先日来いくつかの本を読んだ。地球が生まれたのが 46 億年前、最初の生命誕生が海の中で 38 億年前。地球には紫外線が降り注ぎ、火山活動が活発で地上は生物には過酷な状態だった。生物の材料は、アミノ酸・核酸塩基・糖などの有機物。それらが、二酸化炭素・チツソ・水・雷の放電・紫外線などのエネルギーが加えられ生まれた。それら藍藻植物（シアノバクテリア）が光合成をおこなって、酸素を作り出した。

西條勉先生：宇宙は生命に満ちあふれている、これが日本の神話の立場だ。古事記では千年以上前に、生命を宇宙の根源とする見方を出していた。

古事記の冒頭部に、「アメノミナカヌシ」以降の七神について、いずれも、「独神（ひとりがみ）と成りまして身を隠したまひき」という。二番目の「タカミムスヒ」「カムムスヒ」両ムスヒの次に、「ウマシアシカビヒコジ」のアシカビは、葦の芽という生命の象徴だ。次に、「天の常立（アメノトコタチ）・国の常立（クニノトコタチ）」の神が現れる。「トコ・タチ」は永遠不動のものが現れることだ。「オルコ→ムスヒ→アシカビ→トコタチ」を貫いているのは、「生命」の活動だ。あらゆるものの根源に生命活動を置くのが、日本的思考なのだ。

先生は、名前が出て身を隠してしまう神、この神の存在が日本的で大事だといわれる。「最初の最初であり 宇宙であり 生命だ」とおっしゃる。「おとぎ話 神話 ではなく ビッグバンから 思考思想の世界 宇宙の根源 生命」 古事記がそれほどまでに壮大な物語だとは、素晴らしい。「ほんとうならば」なんて言うまい。

そのあと、いくつかの神が現れ、ついに、「イザナキ・イザナミ」があらわれる。

西條勉先生：「イザナキ・イザナミ」はオノゴロ島を作り、ヒルコを生み、大八島を生む。火の神を生んで火傷を負い、イザナミは黄泉の国に行ってしまう。イザナキが後を追ひ、黄泉の国から脱出したのち、汚れを清める、「みそぎ」を行うと、神々があらわれ、最後に、アマテラス・ツクヨミ・スサノオがあらわれる。

ヒルコ：国土を固めるために、オノゴロ島に降り立ったイザナキ・イザナミの二神は生殖行為によって国を生む。日本列島を生む前に、ヒルコというひと悶着がある。「女が先に声をかけたからだ」というのは、男尊女卑的な夫唱婦隨の考え方、儒教の考え方だ。神話は無文字の時代から一万二万年語り継がれてきた。たかだか三千年前の孔子の儒教が神話に出てくるはずがない。古事記の編者がヒルコの説明のため、神話を歪めたのである。口承の神話には、もともと、話の筋やら、整合性はなく、理由も説明もなかったのを、儒教で説明した。

火の出現：イザナミは順調に日本列島を生み、神々を生む。四十神ほど生んだところで、火の神、「カグツチ」を生む。この火は火山などではなく、人にコントロールされた文明の火である。日本の神話も火の出現で、土器や鉄器など火力を利用した製品があらわれ、文化のレベルが高くなる。大火傷を負ったイザナミは、苦悶のうちに、金属の神、土器の神、ミツハという水神が生まれる。古事記には四百神ほどの神々が名を連ねる。自然の景観を思わせる神、オオワタツミ、ハヤアキツヒコ、クニノザギリ・・・。ミクマリは分水嶺から水を分ける。クヒザモチはく汲みひさごもち - ひしゃく。自然現象ではなく、人間が生活に使うための自然がどんどん生まれ、列島に文化が形成されたようすを神の羅列であらわした。

火の神、「カグツチ」の次は、刀剣の神、「タケミカズチ」の登場。妻のイザナミを失った悲しみに怒り狂ったイザナキは、カグツチをめったきりにして血が飛び散った。火と血で沸き立つ坩堝の中でタケミカズチは生まれる。製鉄とか、燃え上がる炉とかの文化文明が紹介される。火をコントロールする高度な技術を獲得した、高温の日が鉄を溶かした。古代文明の最高の技術だ。

黄泉の国：イザナミは死んで黄泉の国へ行く。イザナキは後を追っかけ、黄泉の国からイザナミを引き戻そうとする。イザナミは、「しばらく 私を 見ないでください」イザナキはそれを見てしまう。

古事記にも、ギリシャ神話にも、「やってはいけない」「見てはいけない」というような命令を破ってしまう。これを、「禁室型」の話という。約束や禁止は破られるのが常識だ。



◎本日の山は、遠敷峠（おにゅう）のあたりを時計回りにまわる、同道の上西さんの計画。「これなら 自転車を積んでいけば 楽じゃないか」 登山口は、かつて、衣川さんとキャンプをしたことがある広場の横。遠敷峠は、やはり衣川さんと峠のてっぺんに車を止め、百里が岳→木地峠→上根来と反時計回りに歩いた。ちょうど二人で予定していた朝に河瀬さんから、「澤山さんが亡くなった 今夕 6時から お通夜」との連絡が入った。

◎「生杉（おいすぎ）」これはなんと読むのだとしばし悩んだ。何度も来たことがある、葛川：梅の木から、生杉まで、川沿いの風景は実に牧歌的で気持ちがあらわれる、思い出しながら車を走らせた。自転車を遠敷峠の下あたりに止め、車で芦生の京大演習林近くまで来て止めた。「なんだ ここは 知ってるぞ」の場所だった。

◎9時前：朝は6時過ぎに家を出た、あたりはなかなか遠い、車での行程が2時間半かかってしまう。昔、車を止めて一晩寝た広場のある場所のそばが登山口だ。三国峠という標識には、高島トレイル：中央分水嶺と書かれている。上のほうにもうすでに尾根が見える、40分のコースタイムだ。ここから京大演習林までもすぐ、演習林の入り口あたりの登山口から登ったことがあるが、尾根まで簡単に登れた。

◎谷筋を登っていく、何日か雨が降っていないので、水の量も少ない、あっちかな、こっちかなと迷いながら登る。杉の植林の中に大きなケヤキの木がある。青空に冷たい風が流れる、手袋が欲しい。昨日は、「季節が逆戻り冬の寒さです」と天気予報氏が言うように冬のシャツを二枚重ねて過ごした。今朝も寒かろうとダウンの上着を用意していたが、暖かいので置いてきた。陽は照っているがまだまだ冷たい。

◎クチクボ峠に登ってきた。峠に登りついたら、二枚重ねのシャツを脱ごうと思っていたが意外と寒い、このまま進むことにした。後ろが三国峠、前が遠敷峠、滋賀県と福井県の境界尾根道である。左側は福井県側で雑木林、右側が滋賀県側で針葉樹林だ。もっともこのあたりは京都府との境もすぐそばだ。

◎クチクボ峠から歩いてすぐに、T字路、左は拳原と書いてある。拳原は尾根からずっとの地名のようで、今から進む遠敷峠あたりの尾根からずっとの地名である上根来と隣り合っているのかな。

◎シャクナゲかと思ったら、ユズリハが多くみられる。「おお 精霊が 宿る木」がある、まだ活着しているのかわからないが、上半分が無くなって苔むしている。「まだちょっと 貫禄がな」と思うが堂々と立っている。

◎803 というピーク、昔の人は山の隅々まで名前を付けているのだが、ここはない。尾根道から3分ほど離れたところにある、ポコリンとお椀状のところ、気持ちがいい。ここからしばらくはなだらかなポコリンが続き、小さな水たまりもある。下草がなく、小さい樹が林立する中に、でかい樹が立っている。この景色風貌は素晴らしい、風が少し暖かくなってきたので、シャツを脱いでザックにしまった。

◎水がほとんど干上がった池、オタマジャクシが居るのかな、足が潜りそうで近づけない。今年は雪も少ない雨もない、カエルたちは週末の雨を待たなければ。ポコリンポコリン、ダラリンダラリンの大地に、水があり、樹々が生え、倒木が横たわり苔むし、なんとも素晴らしい場所である。

◎江若国境尾根という名で、標高が600~800M ぐらいの連なりである。

◎遠敷峠手前の急なのぼり、エンヤコラと登った、峠超えの車道が見えてきた。少し前に昼飯を食った、今日は朝飯が少なかったので、おおいに腹が減っていた。歩きはじめてすぐにパンを、またパンを、「もうちょっと 旨いものを 持ってくれば よかった」なんて思いつつ、ちょっとくぼんだ鞍部、風がなく寒さがしのげる場所で喰った。いつもの玄米ご飯に黒ゴマと梅干を混ぜてきた。菜の煮たもの、いただいたサラダ、旨かった。

◎南の方角が比良山系だという、知った山の名前が次々出てくるが、このあたりは右も左も山々山の連なりだ。高島トレイルは分水嶺の道、巻いたり、近道はなく、とにかくてっぺんを歩く道のようなのである。

◎車道を通らずに登山道、昔の鯖街道を下る。根来峠で、トレイルと昔の鯖街道が交錯する。「京は 遠いとはいえ 十八里」と言われ、小浜の人たちによって、グジ、タイ、サバが根来峠を越えて京に運ばれた。

◎まもなく終点の川まで帰ってきたのかな。今日は冷たい風と、少し暖かい春が味わえた。樹々の蕾は多少膨らみ、もう十日もすればいっせいに芽吹くかなという状態、一つ二つ小さい花にめぐりあった。

◎自転車まで帰り着き、茶とゼリーをいただいた。6時間の山行でした。6時過ぎに家に帰り着いた。